琉大化學

第 36 号

2022年2月

琉球大学化学同窓会

『琉大化學３６号』目次

□『琉大化學』第３６号の発刊によせて　同窓会会長　３６期　宮　城　　守　・・・・1

□與儀誠一先生　瑞宝中綬章叙勲を祝って
瑞宝中綬章の受章に寄せて　琉球大学教授　２９期　萩　原　和　仁　・・・・3
瑞宝中綬章叙勲おめでとうございます　３６期　大　城　哲　哉　・・・・8

□仲筋一夫先生　１４期（沖縄県ユネスコ協会顧問・学校法人大智学園理事長）瑞宝小綬章叙勲を祝って
回顧・仲筋一夫先生　琉球大学前学長　大　城　　肇　・・・・11
仲筋一夫先生のご指導に感謝　八重山高等学校第２１期　内　間　康　洋　・・・・13

□棚原朗先生退官に寄せて
放射化学と共に　琉球大学元教授　２７期　棚　原　　朗　・・・・15
感謝の言葉に代えて　４６期　儀　間　真　一　・・・・18
棚原先生の思い出　５０期　森　山　文　基　・・・・20

□石田哲夫先生退官に寄せて
化学系での七年間の研修を修了して　琉球大学元教授　石　田　哲　夫　・・・・22
石田先生からの学び多き日々　６３期　下　地　康　介　・・・・24
石田先生の退官に寄せて　６６期　髙　橋　昇　流　・・・・26

□思い出と近況
沖縄での４年間を思い出して　３６期　伊　藤　憲　治　・・・・28
高校野球の裏方として　３６期　中　村　　健　・・・・30
かけがえのない仲間との出合い　４２期　知　念　和　代　・・・・32
思い出のアルバム　・・・・34

□表紙『化学の道は、挑戦の道』　３６期　造　倉　哲　治　・・・・39

□資料編
新規会員名簿（令和３年度）　・・・・40
理工学研究科所属一覧　・・・・41
令和３年度　役員・各期幹事名簿　・・・・43
琉球大学化学同窓会会則　・・・・44
琉球大学化学同窓会個人情報保護方針　・・・・47
琉大逍遥歌　・・・・49
編集後記　・・・・50

琉大化學　第36号の発刊に寄せて

琉球大学化学同窓会　会長
沖縄東中学校　教頭
３６期　　宮城　守

琉球大学化学同窓会員の皆様お元気でしょうか。今回、同窓会36期の会長を引き受けることになりました宮城です。

まずは、例年11月に開催しておりました本会の総会及び懇親会が開催できなかったことをお詫び致します。昨年度に引き続き、世界的に新型コロナウイルスによる感染拡大が進み、更なる感染拡大に至らないよう我々36期も打ち合わせのための集まりも自粛し、準備が滞ってしまい 11 月に開催できませんでした。何より、会長である私の手際の悪さも相まってのことで申し訳ございません。

そんな中、11月にうれしいニュースが飛び込んで参りました。御存知かと思いますが、琉球大学名誉教授の與儀誠一先生が瑞宝中綬章。琉球大学理工学部化学科卒業の仲筋一夫さんが瑞宝小綬章を受けられたというニュースです。本同窓会と関わりのある御二方の吉報に、私達後輩も非常に嬉しく、誇りに思っております。

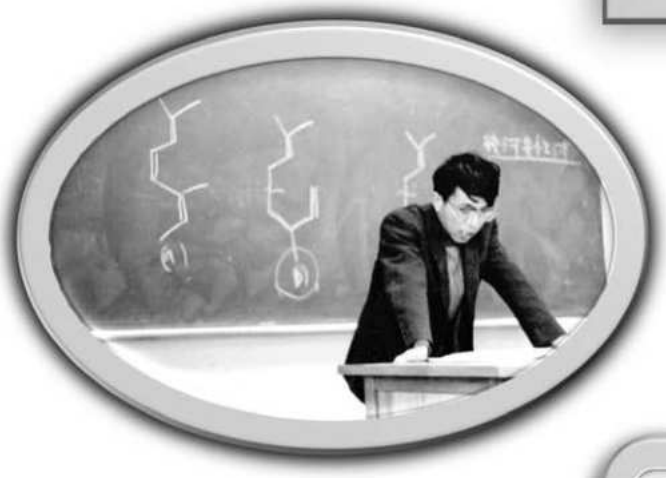
さて、2 月に総会開催致の予定でしたが、新型コロナ感染拡大を防ぐため、顧問とも相談し、総会及び懇親会も開催なしと判断致しました。来年こそは、一人でも多くの会員の皆様と再会できることを楽しみにしております。

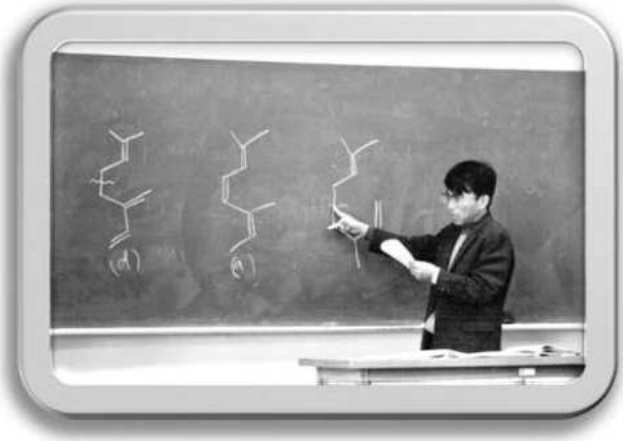
会誌編集にあたり執筆頂きました皆様、化学系事務局の皆様、御協力に感謝致します。本会の益々の発展、会員皆様の御健康、御多幸を祈念いたします。

祝 叙 勲

與 儀 誠 一 先 生

瑞 宝 中 綬 章





有機機器分析の授業で教鞭をとられている與儀先生

祝辞

與儀誠一先生の瑞宝中綬章の受章に寄せて

国立大学法人 琉球大学
理学部海洋自然科学科化学系
荻原和仁　（29 期）

この度、與儀誠一先生（琉球大学名誉教授）が瑞宝中綬章を受章されました。おめでとうございます。與儀先生と私の出会いは、卒業研究で有機化学講座に配属されたのが最初であったと思います。與儀先生は合成を専門としておられましたが、私は合成の道には進まず、天然物の研究の方を選択したので、研究で直接指導を受ける機会には恵まれませんでしたが、研究の進捗状況発表会や文献紹介のセミナーでは鋭い質問を受け、高校までの学習とは違う大学での学修の厳しさを教えていただきました。当時は、4年生を対象とする必修講義である「高分子化学」があり、各研究室に配属された同期が、週に1度集まる機会を与えてくれる講義でもありました。與儀先生の講義を受講された同窓生は懐かしく思い出されると思いますが、毎週1回は授業の中にジョークを混じえて講義を進めておられ、それを聴き逃すまいと我々学生は先生の声に耳を傾け、その結果、授業が理解できるという素晴らしい講義テクニックを築き上げておられました。いま同じ大学の講義を受けもつ身としましては、頭が下がる思いであります。また、当時はまだ修士課程しかなかったのですが、大学院の授業の有機合成化学特論では、合成が大変難しい、あるいは分子の形に特徴がある化合物に関する合成法を教えていただき、特に、オリンピックの五輪の輪がそれぞれの輪の中を潜っているリング状の化合物の合成の講義を受けた際には、有機合成化学の

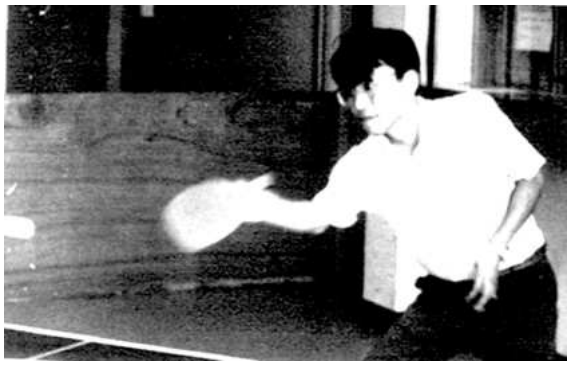


イラスト 1. 有機化学講座の行事(1981 年).
左：忘年会で学生と談笑する與儀先生, 右：リフレッシュタイム：卓球はなかなかの腕前. ほとんどの学生は與儀先生の打つ魔球に翻弄されました. 中学・高校と卓球部経験者だった E 嬢を本気にさせました。

日々の進歩に大変驚かされたことを今でも憶えています。さらに、修士課程終了の間際には、2年間の研究成果を学会で発表する機会があり、その講演要旨を作成する際に、懇切丁寧にご指導いただきました。よそよそしい書き方ですが、決してそんなことはなく、当時は小講座制でしたので、研究の合間を見ての卓球懇親会（リフレッシュタイム）、誕生会、ソフトボール大会、今は懐かしい忘年会など、講座をあげて楽しく行っていました（イラスト1）。

さて、縁あって私は修士課程修了5年後に、與儀先生に琉球大学理学部化学科有機化学講座の助手として拾っていただき、有機化学講座のスタッフとして、また、社会人として與儀先生のご指導を仰ぐことになりました。特に、後で述べますように、與儀先生が1993年に大会実行委員長を務めました日本化学会主催の「第37回香料、テルペンおよび精油化学に関する討論会」は、有機化学講座では初めてとなる500人規模の参加者による学会の開催で、有機化学講座あげての一大イベントとなり、化学会の役員の接待、各会場の見廻りと與儀先生は大変ご苦労されました。学会は準備段階から経費がかかるもので、その大会資金を寄付などによって事前に集める際に、與儀先生が教育界、研究界のみならず財界、産業界と広く人脈を広げておられたことに大変驚かされました。また、同時に、人との繋がりの重要さをご教授いただいた瞬間でもありました。

與儀先生は、地域の小学・中学・高校生の教育にも力を入れられ、地元の小・中学生を対象にした「化学への招待」などの実行委員長を務め、会場で高分子を題材とした魅力ある授業を展開されてこられました。その授業で、與儀先生が企画された2作品をイラストで紹介させていただきます（イラスト2）。

イラスト 2. 地元の小・中学生を対象にした「化学への招待」などで用いた題材。左の作品は高分子を用いたストラップの作成、右の作品は蓄光剤を用いた栞（蛍の尾が光ります）の作成。
いずれも絵のセンスは抜群です。聞くところによると、高校時代に所属していた生物クラブで、先輩に生物のスケッチの仕方を叩き込まれたとのことです。

最後になりますが、この度の與儀先生の叙勲の受章には、もちろん奥様の存在を忘れてはなりません。奥様の内助の功があってのことと思います。奥様は、與儀先生の健康を気遣って、ご結婚されてから退職されるまで、1日たりとも手作弁当を欠かしたことがないと伺っております。また、與儀先生のお宅にお伺いすると必ず奥様がそばに寄り添っておられ、お客様に失礼があってはいけないと常に気を配り、お客様の特徴（顔・所属等）を記憶され、何かあるたびに話題に出し、與儀先生を側で支えているお姿を毎回拝見しております。

あらためまして、

「琉球大学での教育研究のみならず社会への地域貢献・功労に尽力されました與儀先生、
また、その先生をお側でいつもお支えして来られました奥様、
この度の瑞宝中綬章の受章、誠におめでとうございます。
心よりお祝い申し上げます。」

イラスト 3. 與儀誠一先生と奥様（好子様)のツーショット
写真左：與儀先生最終講義の教室で、写真右：記念食事会の会場（旧グランドキャッスル）で。

與儀先生の略歴および大学および地域への貢献については、以降にまとめていますが、化学系のホームページに紹介していますので、そちらも参照してください。

與儀先生の略歴並びに大学および地域への貢献

與儀誠一先生は、昭和41年4月琉球大学教養部助手に採用され、昭和42年1月琉球大学教養部講師、昭和48年年4月琉球大学理工学部助教授、昭和63年8月琉球大学理学部教授へと

昇任されました。40有余年に渡り、大学の教育および研究に尽力され、大学行政にも携わってこられました。

大学教育では、教養あるいは共通教育科目の自然系科目、専門教育科目の有機化学分野に関する必修科目および選択科目を担当され学士の育成に、大学院教育でも有機化学分野に関する講義と特別研究および特別演習を担当され修士の育成に尽力されてきました。

研究の分野では、多数の論稿を発表されましたが、1）日本化学会の英文誌に掲載された一連の“1,2-Diazocine”関連の論文は、安定な1,2-diazocine の合成法とこの化合物を用いた合成困難な新規複素環化合物の新規合成法をそれぞれ確立したもので、有機合成化学および化学工業に多大きな功績を与えました。また、２）画像デバイスとしての有機ELの合成研究も行い、厚さ１ミリのディスプレイの開発に貢献されています。さらに、3）法人化後は、大手光学機器メーカー等と機能性有機材料の開発で共同研究を行い、社会に役立つ材料を開発するとともに多額の外部資金獲得のためにも尽力し、大学の財源確保にも貢献されています。

大学行政では、化学科主任、化学系主任、海洋自然科学科長をそれぞれ勤められ、特に理学部改組に、法人化直後の理学部の運営に主任として尽力されました。また、大学における知的財産権研究プロジェクト総合委員会委員を始め、琉球大学地域共同研究センター運営委員会委員、琉球大学発明審査委員会委員、琉球大学遺伝子実験施設運営委員会委員、琉球大学機器分析センター運営委員会委員、琉球大学営利企業役員等兼業審査委員会委員等の全学委員を歴任され、琉球大学の発展に寄与されてきました。これらのご功績が認められ、名誉教授の称号も授与されています。

学会活動では、日本化学会主催の「第37回香料、テルペンおよび精油化学に関する討論会」、日本化学会主催の「油化学関連シンポジウムin 沖縄　−沖縄の資源−」および日本化学会主催の「2006年度日本化学会西日本大会」のそれぞれの大会実行委員長を務め、琉球大学での学会誘致および開催に尽力してきました。

学外における活躍もめざましく、財団法人役員、TEAC討論会幹事、南方資源研究会幹事、近未来素材研究会世話人、九州大学生産科学研究所講師などを歴任しております。

退職後も、沖縄県立看護大学非常勤講師や一般財団法人沖縄県環境科学センター理事をされています。

與儀誠一先生

瑞宝中綬章叙勲おめでとうございます

沖縄県立名護商工高等学校
３６期　大城　哲哉

この度は名誉ある瑞宝中綬章を叙勲されたとのこと誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。長年のご研究ならびに化学教育、人材育成、大学運営など多岐にわたり、沖縄の学生の教育や発展に尽力された功績が実を結ばれたものと拝察しております。與儀先生には有機化学をはじめ自然科学等について多くのご指導を頂きました。有機化学教室にて学んだ私達教え子にとっても大きな喜びであり感無量であります。與儀先生と出会い、多くの貴重な勉学の機会を持てたことに改めて感謝するとともに、大きな誇りであり光栄に感じております。

私は與儀先生のもと、比嘉松武研究室で天然物有機化学を４年次と大学院でお世話になりました。４年次の頃は公害衛生研究所のハブ支所にて富原さんと共に「坑ハブ毒素の植物成分からの検索」をしていました。大学院では沖縄産植物の成分研究アワダン（*Melicope triphilla* Merr.）の成分についての研究を行いました。研究テーマに選んだきっかけになったのは「アワダンをシロオビアゲハの幼虫に与えたところ死んだ」との報告でした。この報告は先生の同級生の長嶺邦夫氏（前沖縄昆虫同好会会長）からであったようです。調べる過程での発見や疑問に直面するたびに、驚きと知的好奇心で研究を進めてこれたのは、身近な動植物や自然現象にもアンテナを広げ、見落としがちな些細な事柄にも興味関心を持ち、常に科学的視点で考える素晴らしさを教えて下さった與儀先生のお蔭であります。ご縁があって奇しくも現在、私も沖縄昆虫同好会に所属しており、長嶺さんと同じく活動をしております。

さて、学生時代の思い出ですが、先生は非常に冗談好きで、ダジャレなどを言った後に自分で笑うのがセオリーでした。それにつられて私たち学生も笑ってしまう。常

に場の雰囲気を和やかにしてくれるユーモアと優しさに満ちた先生の傍らには、自然と学生たちが集まっていました。印象深い思い出としては正月に先生宅へ年始のご挨拶に行った際、必ず出される DNA です。これはダイコン（D）とニンジン（N）の和え物（A）なのですが、二重らせん構造をしており、まさしく DNA ですね。これには参りました。與儀先生は「ダイコン…、ニンジン…、和えも…ガッハハハ」と豪快に笑っていましたね。いつも朗らかで優しく、私たち学生を温かく迎えて頂きありがとうございました。

私は現在、県立高校で、化学の教員として勤務しております。前任校の球陽高校では、科学教育の研究校としてスーパーサイエンスハイスクール SSH に取り組んでおり、私もその中で化学を教える立場となり、「何をテーマに科学的視点で取り組むか」、「探究活動とは何か」、「どうやったら生徒にとってよりよい探究活動になるのか」など生徒達と一緒に試行錯誤しながら活動していました。その時に先生から教えて頂いた、身の回りの些細な事柄に興味関心を持ち、科学的視点で考えることの大切さを実感しました。また、琉大では高校生の研究発表の場として沖縄科学技術教育シンポジウム（OASES）を設けており、そこへ生徒とともに参加した時に與儀先生の姿を拝見しました。先生はそこで生徒への適切なアドバイス、心構えなどを熱心に指導しており、大変参考になりました。また、新報サイエンスクラブでも審査員やオリエンテーション講師などを務め、児童生徒の科学研究や科学の芽の育成などにも尽力されており、その姿は化学教育を担う私たちの目標でもあり、尊敬する偉大な恩師であります。

微力ながら私も先生のように、化学の教員として生徒たちの心に何気ない事柄を科学的視点からとらえて探究する喜びの種蒔きが出来るようにこれからも精進し頑張っていきたいと思います。

與儀先生には、これを機にますますご健康でご活躍されることを祈念しております。このたびは、瑞宝中綬章叙勲誠におめでとうございます。

祝叙勲

仲筋一夫先生

瑞宝小綬章

回顧・仲筋一夫先生

第16代　琉 球 大 学 学 長
琉球大学特別顧問　大　城　肇

2021 年秋の叙勲で恩師・仲筋一夫先生が瑞宝小綬章を受章されたことを、教え子の一人として心から祝福申し上げ、先生のますますのご健勝とご活躍を祈念いたします。教職公務員に対する永年の功績に対する叙勲が栄えある瑞宝章ですが、仲筋先生のご功績については略歴書等を参照して頂くことにして、50 余年前の先生との思い出の一端について、紙幅の許す限り記すことにします。

琉大化学同窓の会誌『琉大化學』が長年にわたって刊行され、同窓の絆を保持してこられたことに敬意を表します。歴史に if はないといわれますが、私はもしかすると化学同窓会の名簿に名を連ねていたかもしれません。

私は、1967 年に八重山高校に入学し、日本復帰 2 年前の 1970 年に卒業しました。当時は、日本の大学に入学できる国費自費制度と米国の大学に入学できる米留制度がありました。私は国費自費制度にはもともと関心はなく、米国留学をしたいと思っていました。米留には琉大に行った方がよいという誤った情報（？！）も手伝って、琉大を志望しました。専攻は化学だと決めていました。高校 2 年の時に当時の八重山高校の化学部の部長を務めていたこともあって、琉大の理工学部化学科が第一志望でした。それには、3 年の時の担任であった仲筋一夫先生の影響がありました。

ところが、なぜか願書を出したのは法文学部の経済学科でした。いまもって志願先変更の理由はわかりません。仲筋先生の元へ合格の報告に行きました。そのとき、仲筋先生は「化学でなく経済学を選んだ君の顔など見たくない！」と素っ気ない対応でした。仲筋先生が喜ぶ学科を選んでおれば、私は化学同窓会の一員になっていたはずです。なお、その後現在に至るまで、仲筋先生とは飲み仲間として、相変わらず教えを請うているところです。

仲筋一夫先生は、石垣市宮良のお生まれで、八重山高校を経て琉大文理学部の化学科をご卒業なさっています。私にとっては高校の先輩でもあります。大学卒業後、高校の化学担当教諭として赴任されたのが、母校の八重山高校でした。そのとき、私は同校に入学したばかりでした。同じ時期に 1944 年生前後の新任の先生方が赴任されましたが、その中で仲筋先生の小柄ながらも溌剌としたエネルギッシュなお姿がひときわ目立っていました。昼休みには、中庭にあったテニスコートで軟式テニスに興じておられたように記憶しています。

個人的に化学が好きだったこともあり、3 年の時の担任の仲筋先生には親しみを持って接していました。当時は、日本復帰運動が盛んな頃でした。朝のホームルームでも先生の復帰論や平和論が、度々、情熱的に披露さ

れました。クラスメートも先生の話を傾聴し熱く議論したものです。先生は生徒から慕われ、身近な話題や恋愛論などでも生徒たちと気さくに意見交換＆議論をされていたのが思い出されます。そのようなことを通して、社会事象にも関心を持った生徒の自立心を育てようとしておられたのだろうと推測しています。

仲筋先生は、2004 年 12 月に、文部科学大臣から多年にわたる学校教育の振興に尽力した功績を称えられ表彰を受けておられます。教職生活の晩年、浦添高等学校の校長を務めておられた時のことです。浦添高校での取組はもちろんのこと、八重山高校を皮切りにコザ高校、普天間高校、那覇高校（以上、教諭）、真和志高校、小禄高校（以上、教頭）、豊見城南高校（校長）及び教育行政（指導主事）でのご功績が評価された大臣表彰でした。先生は、2004 年度には沖縄県高等学校校長協会会長の重責も務めておられました。

仲筋一夫先生は、教職は人を育てる尊い仕事であるという信念を持っておられます。その信念に従って、退職後も人材育成はもとより、科学・文化の振興にも精力的に関わっておられます。自立した人材（財）が将来の地域社会の形成者・担い手になるという大局的な観点から、天職を通して人材育成に尽力されておられることがわかります。

日本復帰前の混沌とした時代に新任教員として赴任した八重山高校から，校長として定年を迎えられた浦添高校までの 30 余年間の教員生活において、仲筋一夫先生は改革の士として情熱をもって学校経営・学校づくりをなさってこられたのではないか、と新任時代の先生の振る舞いから推察いたしております。数々の改革・改善工夫の取組の果実に対して贈られたのが、この度の瑞宝小綬章にほかなりません。重ねてお祝いを申し上げ、いつまでも穏やかなお気持ちで、ご夫妻お揃いにて寿を重ねられますことを心よりお祈りいたします。誠におめでとうございました！

八重山高校 22 期生の記念誌発刊祝賀会での乾杯のご発声（2020 年 10 月、撮影：筆者）

仲筋一夫先生のご指導に感謝

八重山高等学校第２１期
内　間　康　洋

仲筋一夫先生、この度の栄えある瑞宝小綬章の受章、おめでとうございます。

私は、先生が新任教師として最初に八重山高校に赴任されたときの２１期生で、先生には３年間お世話になり、卒業後もご縁があって、長年お付き合いをさせていただいている者です。

在校中の当時を振り返ってみますと、先生の教育功労のひとつとなるのではないかと思われることがありますので、そのことを簡潔にまとめてみたいと思います。

先生の新任地は、母校の高校ということもあって、自分の後輩にあたる生徒達をどのように指導していけばよいのかなどの思いをめぐらせながらやる気満々で赴任されたものと思います。着任後は、先生が担当教科を熱心に教えられていたことは言うまでもありませんが、それ以外に教育者として取り組まれていたのが、生徒の健全育成指導であります。先生のその取り組みは、親身になって生徒と接していたことで印象深いものがあります。

当時の高校生をめぐる非行実態等については、最近の沖縄県内における高校生の大麻等違法薬物の所持・使用等の非行実態にみられるような深刻な状況はなかったものと思います。ただ非行に至らない深夜はいかい、飲酒、喫煙、家出などの不良行為を行う生徒はいたと思いますが、そんな不良行為であっても、これを放置することによって、取り返しのつかない非行に陥り、落ちこぼれる生徒が出ることもあり得るのです。このため、先生は、生徒達を問題なく卒業させ、卒業後においても良き社会人として活躍できる人材になってもらいたいとの強い思いもあって、生徒の問題行動を未然に防止する指導を強力に進められていたのではないかと思います。特に、問題行動の兆候のある生徒に対しては、機会あるごとに、その生徒の家庭を訪問したり、先生の自宅に招いて激励するなどして非行防止や健全育成指導を徹底されていました。事実、学業に追いつけず家出を企てた生徒を連れ戻して、再登校をさせたり、地元暴力

団組員と交際のあった生徒についても、警察の手を借りずに、その組員と会って、暴力団に対する恐怖心を抑えながら直談判し、生徒との関係を断ち切って、その生徒を更生に導いたという逸話もあります。

このように生徒への健全育成に思いを寄せる先生の情熱的な取り組みは、生徒から全幅の信頼が寄せられることとなり、安心して何でも相談できる思いやりのある先生と評されるようになりました。先生のその教育姿勢は、教育者の模範となるものと思いますし、その労苦は高く評価されたものと思っています。

私も在校中に先生の温かいご指導と励ましをいただいたお陰で無事卒業することができましたが、私に限らず先生の恩恵を受けて卒業できた同期の仲間にとっても、先生は生涯忘れることのできない大きな存在となっております。光陰矢の如しという言葉があるように、私達が高校を卒業してから早くも半世紀余りの月日が流れました。その間、先生にお世話になった同期の中には、すでに他界した者もいますが、とっくに定年退職をして悠々自適の生活を送っている者もいたり、現在も会社重役として精力的にバリバリ働いている者もいたりで、時折、そんな仲間と集う酒座においては、高校時代の先生との思い出を語ることがあります。また、先生とは、高校卒業後も、小規模ながら同期の仲間とともに、毎月 1 回先生を囲んで開く模合などを通じて長年お付き合いを続けさせてもらっています。その模合の場が、いわゆる「仲筋学校」となり、高校時代とはひと味違う教師と生徒との関係が築かれ、その機会に先生の豊富な人生経験話を拝聴することができ、いろいろと学ばせていただいております。

このように高校時代から今日に至るまで、いろんな面で格別なご指導をいただいている先生に対し、この紙面をお借りして、改めて敬意を表し、心から感謝するとともにいつまでもお元気で、ますますご活躍されることを祈念申し上げたいと思います。

放射化学と共に

琉球大学理学部元教授

２７期　棚　原　　朗

琉球大学に赴任する前，私は沖縄県庁職員として県が実施するウリミバエの根絶プロジェクトに従事していた。1972 年の復帰当時，沖縄県には害虫であるウリミバエが蔓延していたため，植物防疫法によって沖縄の果菜類が本土へ出荷できないでいた。これを解決するにはウリミバエを県内から一掃する必要があり，その方法として不妊虫放飼法が採用された。これは，不妊にしたウリミバエを野外に放し野生虫と交尾させると卵はふ化せずに世代が減少する。これを繰り返すことで正常なウリミバエを根絶する方法である。このウリミバエの不妊化には放射線が用いられ，そのための放射線照射施設が必要であった。実は大学４年の頃にこの壮大なプロジェクトが計画されている事をすでに知っていたため，琉大を卒業後，金沢大学で就学中に施設の運営に必要な第一種放射線取扱主任者の国家資格を取得していた。おかげで選考採用の形で沖縄県庁に（無試験で）採用された。しかし，放射線照射施設の設計・建設には素人同然で，設計上の遮蔽計算等を学ぶために原研（原子力研究所）に通い詰めた。原研の職員の助けを借りながら設計や実際の建設上の問題点等をクリアしながら建設を進め，1984 年に照射施設が完成しコバルト 60 線源（2.22PBq）が搬入された。

プロジェクトは幾多の困難を極めたが，職員一丸となって克服し，宮古群島のウリミバエを 1987 年に根絶，翌年には沖縄群島の根絶も目前となった。その頃からであろうか「私の役目は終わった，さて，次は何をしようか？」と異動先を考え始めた。

ちょうどその頃，琉大の化学科で職員（助手）の公募があった。特に気に留めてはいなかったが，大学時代の同期から応募を勧められた。幸いウリミバエに関する論文もいくつか書いていたので，それらを資料として応募し運良く 1989 年に採用が決まった。講座制であった助手当時は研究費が乏しかったが，幸い教授の平良初男先生や助教授の大森保先生らの科研費等が数年にわたって採用されたた

め，研究費に困る思いをすることはなかった。1993 年頃から平良先生が学内に機器分析センターの設置にむけて学内で尽力された。センター設置には助教授のポストがあったので私が応募した。こうして 1995 年に機器分析センターの設置が決まり，2000 年に 7 階建ての理系複合棟が建設されその 3 階に移設された。センター長に上原與盛先生が決まり，私と二人だけでスタートした。平行して技術職員の選考が進められたが，私は 2001 年にハワイ東西センターへの留学が決まり，1 年間離れることになった。留守の間にセンター長の尽力で池原清子さんが生物系から異動してきた。

私の身分は，学部から独立した機器分析センターの職員であったが，化学系では予算以外は教育研究を含め職員と同等に扱っていただいた。教授会でもオブザーバーとして参加を認めていただいた。2005 年頃から大学の中で組織の統廃合が進められ，機器分析センターに RI 施設，環境安全センターを統合し，2007 年に機器分析支援センターとして発足した。

機器分析支援センターには教授のポストはなかったが，2013 年に化学系で教授の公募がありこれに応募して採用され，2015 年に 20 年ぶりに理学部に戻った。途端に理学部の各種委員に任命され多忙となり，2018 年には系主任と学科長を拝命した。その影響で卒論・修論の学生とのディスカッションが減ったのは否めない。2021 年の退職まで数年となったとき東京オリンピックの 2021 年開催が決まり，華やかな中で退職することにほくそ笑んだものである。しかし，新型コロナ感染症のパンデミックで緒イベントは軒並み中止（延期）され，なんともさみしい退職年となってしまった。

琉大在職中のことで一番心に残っているのは，やはり私の研究室を選んでくれた学生と過ごした時間である。フィールドでの調査研究が多いので，学生と共に汗を流して駆けずり回ったのが懐かしい。特に洞窟で天然放射性核種の ^{222}Rn を利用して行う洞窟内大気に関する研究はライフワークとなり，本島，南大東島，石垣，西表島で行われ，その研究内容は全国的にも希少な存在であった。また，地下水や千枚岩の研究では，試料の採取に奥の山荘やビーチで宿泊しながら行い，夜に学生と飲みながら語り合う時間は格別であった。これらの研究成果は学生によって国内のみな

らず外国の学会でも発表された。

環境放射能に関する県内の研究者は少ない。そのため東日本大震災時の放射能測定には県内外からの測定依頼に応えるため，2 台の測定装置を充て，学生の協力の下その年に 1,100 件の試料を測定した。また，県民の不安に応えるため 7 回の講演会を実施し，テレビや新聞等のマスコミ対応も行った。沖縄に駐留する米軍からの放射能に関する事件・事故も少なくない。2004 年の沖縄国際大学へのヘリ墜落にともなう放射性核種の紛失，2006 年のホワイトビーチでの原潜による放射能漏洩事故，2017 年の東村高江集落へのヘリ墜落事故による放射能汚染への対応を行った。

学業以外では，なんと言っても就任当時から続けた「夜行軍」である。名護から大学までの約 68㎞ を夜通し歩く過酷（？）なイベントは 32 年間一度も中止することなく研究室の大きな恒例行事として継続できた。きつい道のりを必死で歩く姿に学生の隠れた一面を見ることが出来，参加した学生もまた一生の思い出になると思う。

年に数回行われた飲み会もまた学生との楽しいひとときであった。写真が趣味の一つなので，イベントの記録が多く残っている。今後はこれらをひもときながら，夢のような時間を思い出したいと思っている。

感謝の言葉に代えて

琉球大学研究基盤センター

４６期　儀　間　真　一

棚原先生、この度は定年退職おめでとうございます。

先生には学生時代に講義や実習でお世話になりましたが、それ以上に職員になってからのお付き合いが長くたいへんお世話になりました。

職員として最初の関りはメールでのやり取りでした。学生の頃、放射化学実験も履修しておらず放射線に関する知識も殆ど無かった私が、何の因果か琉大 RI 施設の技官として一人放り込まれ、日々の業務に右往左往している時に、RI 施設の設備について熟知されている先生がハワイから救いの手を差し伸べてくれました。2001 年に私が琉球大学職員に採用された当時、棚原先生は「小渕国際交流基金フェローシップ」の第 1 回奨学生としてハワイ（EAST－WEST CENTER ）に留学中でした。海外生活で御多忙にもかかわらず、私のごく初歩的な質問にも親切丁寧にアドバイスして頂き、大きな安心感を得たことを今でも覚えています。

留学を終え帰国されて間もなく RI 施設長になられてからは一緒にお仕事をする機会が増えました。施設利用者からの放射線に関する学術的な質問への対応はもちろんのこと、施設運営の事務的な仕事についてもいろいろ教えていただきました。例えば設備導入予算要求書類作成の際、単に今ある装置が古くなったからとか新機能が追加されるからといったことではなく、まず大学の教育研究にどれだけ貢献できて、さらに地域社会にどのように貢献できるかというところまで考えないと要求は通らない。そして、採択される要求書を書くためには日ごろからアンテナを張って情報を集めておく必要がある、と放射線関連の新聞切り抜きがたくさん貼られた分厚いスクラップブックを見せていただきました（当時インターネットも普及しつつありましたが、ま

だまだ新聞が貴重な情報源でした)。毎年何件もの予算申請書を書かれている先生方にとっては当たり前のことかもしれませんが、新米技官の私には目から鱗が落ちる貴重なお話でした。

RI 施設長の任期中に組織改編にも取り組まれました。棚原先生はもともと機器分析センター（当時）の教員でありつつ RI 施設長も兼務されていたので、学内の共同利用施設の状況を俯瞰的に見て問題点に気づかれたのだと思います。常々「機器分析センターと RI 施設を統合したい。できれば他の小さな施設も一緒に一つの組織になって業務を効率化し、予算規模も大きくしたほうが運営し易くなる」と仰っていました。その頃全国の大学で共同利用施設統合の動きが活発化してきたこともあり、大学本部も施設統合の検討を始め、2019 年度に機器分析センター、環境安全センター、RI 施設の 3 施設が統合して機器分析支援センターが発足しました。統合プラン立案や各センターの長、所属職員、大学本部等との調整役として奔走された棚原先生は間違いなくセンター統合の立役者でした。その後、2016 年には極低温センターとも統合して研究基盤センターとなり、構成人員が増えたことによりさらなる業務効率化が図られました。これら一連の統合のきっかけを作った先生が大学の組織運営に与えた影響は非常に大きいと思います。

仕事以外で棚原先生の凄さを感じたのは「人間、気持ちの持ちようでなんとかなる」を実践されているということです。棚原先生は風邪をひきません（御本人談)。ガラガラ声で鼻をすすりながら「ちょっとだるいし熱も 38℃ぐらいあるけど大丈夫。僕は風邪ひいたことないから。」・・・ご本人が仰るならそうなのでしょう。鉄人です。

仕事も人生観も、本当に多くのことを学ばせていただきありがとうございました。棚原先生には今後ともお元気で、益々ご活躍されることをお祈り申し上げます。

棚原先生の思い出

沖縄科学技術大学院大学
安全衛生セクション
５０期　森　山　文　基

先日、出張で福岡県北九州市の八幡駅近くで講習を受けることになり、ホテルを探していたところ懐かしい名前を見つけた。「ビジネスホテル帆柱」である。

このホテルには学生時に宿泊したことがある。私は棚原研で鍾乳管（鍾乳石の初期状態）の研究をしており、北九州市で開催される洞窟学会で発表するため、棚原先生とこのホテルに宿泊した。なぜ二十年近く前に宿泊したホテルを覚えているかというと、記憶力がよいからではなく、強烈な思い出があるからだ。

当時のビジネスホテル帆柱は老夫婦が二人で経営しているようなホテルで、全国展開しているビジネスホテルと違い、門限があった。学会当日の朝、ホテルの主人から「0時で閉めますからね。」と念を押されて先生と会場へ出発した。

棚原研ではいくつかの洞窟で調査を行っており、そのひとつに普天間神宮社裏殿に位置する普天満宮洞穴があった。当時の宮司の新垣さんは、普天満宮洞穴の研究者でもあり洞窟学会の評議員で、一緒に学会に参加していた。

学会は順調に終わり、アットホームな懇親会で盛り上がった。懇親会後、新垣さん、棚原先生、私の三人で飲むことになった。学会会場の近くに居酒屋がなく、おそらく小倉駅に移動して飲んだ。おそらく、というのは居酒屋に移動する時点ですでに酔っぱらっておりよく覚えていないからで、状況証拠からの推測である。

新垣さんとの二次会はとても楽しく、酒が進んだ。23時を回ったころ、

「そろそろ終電ですよ！」

とおかみさんの声。この時点ですでに終電に間に合ってもホテルの門限に間に合うかは怪しかったのだが、

「ここは私が払いますので」

「いやいや私が」

と新垣さんと棚原先生が譲らない。棚原研は洞窟の研究をしている関係上現地調査が毎月のようにあり、ときどき棚原先生も同行した。昼食は洞窟近くのレストランや沖縄そば屋が多いのだが、そのようなときは一度もおごってもらった記憶がない。常に割り勘である。その棚原先生が「私が私が」と譲らない。もはや終電を諦めた私は、いつ終わるともわからない新垣さんと棚原先生のやり取りをただただ眺めていた。

そして案の定、終電を逃した。新垣さんは当然タクシーで帰った。棚原先生と私は、当然、歩いた（小倉-八幡は約10 km）。毎年名護から琉球大学までを夜通し歩く「夜行軍」を開催している棚原研である。マラソンも走る棚原先生にこの状況でタクシーという選択肢はない。

ホテルに着いたときには午前1時を過ぎていた。ホテルの主人が言った通り、玄関は閉められていた。「非常口くらいは開いているだろう」と思い探してみたが、開いている扉はなかった。

途方に暮れている先生を尻目に、完全に酔っぱらっていた私は、

「先生、僕にまかせてください。起きてる人に開けてもらいます」

と言うや配管をよじ登り二階のベランダにあがり、電気がついている窓を片っ端からノックしていった。

“深夜1時に二階の窓の外からノック”

開けてくれる人がいるわけがない。今の時代、いや当時も、完全に通報案件だ。

二階の窓をノックし終り、いざ三階へ向かおうとしていた私の耳に突然、

「ワンワンワン！」

と犬の鳴き声がけたたましく響いた。どうやらホテルで犬を飼っていたようで、玄関前で立ち尽くす棚原先生を不審者とみなして吠え始めたのだ。犬に怯むような棚原先生ではなく、

「ハウス！ハウス！」

と輪をかけてけたたましく応戦した。

「ワンワンワン！」

「ハウス！ハウス！」

犬と棚原先生の声が午前1時のひっそりとした街に響き渡る。私も加勢しようと二階から玄関に辿り着いたその時、

「0時で閉めるって言いましたよねぇ」

とホテルの主人が眠そうな目をこすりながら玄関を開けてくれた。犬ではなく棚原先生の「ハウス！」で起きたのかもしれない。その後どう部屋に戻りどう寝たのかは、全く覚えていない。

現在、私は放射線取扱主任者として大学で働いている。十年前に棚原研の同期と結婚し、三人の子供がいる。今の私があるのは、公私において棚原先生のおかげだ。昨年4月には大学に設置された新型コロナウイルスPCR検査室兼務となり心身追い込まれたが、乗り越えることができた。それは、ウラン系列を覚えたことでも半減期の計算方法でもなく、台風明けの奥の山荘でキッチンが真っ黒になるほどいた蟻をホースで流したり、西表島で道に落ちていたサトウキビを一緒に噛んだり、ビジネスホテル帆柱で門限に遅れて犬に吠えられたりした「思い出」のおかげである。棚原研での「思い出」は、私の人生の支えだ。

棚原先生、この度はおめでとうございます。そして、本当にありがとうございました。

化学系での七年間の研修を修了して

琉球大学理学部元教授
石　田　哲　夫

新型コロナ第４波開始の 2021 年 3 月末、私は琉球大学での 7 年間の研修を終えました（定年退職のため)。今から８年前、私の生涯ではじめての就職活動に取り組み、JREC-IN 上に琉大化学系の教員募集を見つけました。滋賀医科大学（29 年間勤務）の教授選で敗退し、30 代の若い新教授の邪魔になってはいけないと思い、応募情報に真剣に目を通すようにしていました。当時の化学系主任は田中淳一先生で、面接の連絡を伝える E-メールのタイトルがシンプルに「人事について」だけでした。私はまた迷惑メールかと思い、即刻ゴミ箱に入れ消去してしまいました。何のメールだったのか後で気になったとき、幸い gmail に転送していましたので事なきを得ました。

京都府の中ほどの山間にある農村の専業農家に私は生まれ育ちました。農薬・化学肥料・農業機械が導入される前の自然（自宅前の小川は様々な生き物であふれ、蓮華・山つつじ・山百合・リンドウ・女郎花・吾亦紅などが季節を彩る）の中で小学校低学年頃までのんびりと過ごしました。里山(松林）で母と落木拾いをしたことや牛と一緒に田んぼを鍬で耕したことを鮮明に思い出します。

最初の京大理学部（入学当時はまだ大学紛争の残り火あり）も次の阪大医学部（研究場所を求めて学士編入）でも基本的にはほったらかしの環境で私は勉強し、1 年間だけ市中病院で研修医生活（救急病棟に住んでいるような生活）をした後、阪大医学部大学院博士課程（生化学）への入学手続きを済ませました。その入学式直前に、滋賀医科大学医学部生化学第一教室の助手への採用が急に決まりました。ですので、私の研究生活は滋賀医大で始まりました。ここでも私は実質的に放し飼いで、研究において上から強い指示を受けたことがありません。医学科では卒業研究はありませんし、修士課程はなく、博士課程の学生は稀にしか来ませんでした。私は実験が大好きで、自分の興味とこだわりのままに、酸化酵素や酸素添加酵素（どちらも酸素分子を反応に利用するのでフラビンか金属イオンが活性部位に存在する）を中心に、数多くの酵素を精製しその性質や反応機構を調べてきました。

私が研究を始めたころは、高速液体クロマトグラフィー（HPLC）は未熟で、分子生物学の諸技術も急速な進歩をはじめたばかりでした。タンパク質のアミノ酸配列（一次構造）を決定するだけでも手間がかかり（したがってそれだけで論文になり)、タンパク質の X-線結晶構造を報告する論文はわずかでした。私がのんびりと研究を楽しんでいる間に生化学・分子生物学の分野は激変しました。今では、大腸菌や試験管の中で目的のタンパク質を天然のままや特定のアミノ酸を別のアミノ酸に変えて合成することは誰でもでき、タンパク質の X-線結晶構造解析も自動化されています。細胞 1 個のゲノム解析・RNA 解析も実現しています。ソフトイオン化と質量分析装置（小数

点以下 3 桁目以上の質量精度）が成熟し、二次代謝物の解析が進んでいます。やりがいのある研究テーマさえ見つけることができたら、それを深く追求していくことができる時代になっています。

琉球大学に着任するとき、①できるだけ迷惑をかけないようにすること、②脊椎動物以外の生物を研究対象にすること、③学生さんと研究を楽しむこと、の３つを心得としました。①については、結局のところ、自分の気がつかないところでいろいろとご迷惑をおかけしたに違いないと思っています。②については、アフリカマイマイ（*Achatina fulica*、嫌われ者害虫であると承知しています）という貴重な研究対象に出会えました。軟体動物（9 万 3000 種）に属する約 75%の種は巻貝類（腹足綱）で、アフリカマイマイは陸生の巻貝の仲間です。この大きなカタツムリは、ナメクジやカエルなどと同様に、広東住血線虫の中間宿主になることが知られています。この線虫は経口感染するので、手洗いと食材の水洗い・加熱・凍結で予防できます。一方、顧みられない熱帯病のひとつの住血吸虫症は住血吸虫の感染で起こり、その中間宿主は小さな淡水生巻貝（*Biomphalaria glabrata*）です。この吸虫は経皮感染する（皮膚を突き破って進入）ので予防が難しく、感染者は 2 億人以上と推定されています。サンゴ礁でも見かけるアメフラシは海生の巻貝で、神経生理学のモデル生物として古くから研究されています。最近、中国の 2 つの研究グループが独立にアフリカマイマイのゲノム解析を報告しました。これにより、海生・淡水生・陸生のそれぞれの巻貝のゲノムが出揃いました。アフリカマイマイの生化学的な研究は散発的に行われてきただけですが、それでも D-アミノ酸を含む生理活性ペプチド・抗菌活性をもつタンパク質・独自の構造をもつ糖鎖などが見つかっています。アフリカマイマイの組織は非常に大きいので、狙ったタンパク質を組織から直接精製することができます。アフリカマイマイの強い繁殖能力の理由、巻貝の海から陸への展開を可能にしたメカニズム、未知の酵素反応の発見、診断薬などに利用できる有用タンパク質の探索などなど興味は尽きません。

③ですが、卒業研究と大学院を含めて 26 人の学生さんと研究を進めることができました。私にとって琉大での最大の収穫です。あまりにも速く 7 年が過ぎ去ったために、ほとんどの研究が学術誌に掲載されるところまでたどり着いていません。幸い、着任時に私と海を渡った実験装置類一式を、コンテナで那覇港から東京港、東京からトラックで大阪府立大学の生物資源開発センターの実験室に搬入でき、移管手続きもほぼ完了しました。自宅から自転車で約 30 分、世界遺産の大仙古墳（仁徳天皇陵、周囲 2.7 km）・五廟山古墳・ニサンザイ古墳の間を通って通学し、朝から夜までこれまでと同様に実験や書き仕事をしています。数年の間に、財政的にも持続可能な（退職金に頼らない）研究体制を構築するつもりです。

生化学のほかに、一般化学・有機化学・分子の世界・基礎ゼミなどの授業の一部を分担させていただきました。講義や演習を通して、私自身が化学の基礎を学習し直すことができました。このことも大きな収穫でした。

私にとって実りの多い貴重な 7 年間でした。みなさまにこころより感謝いたします。

石田先生からの学び多き日々

石田研究室２期生
６３期　下　地　康　介

昨年の３月に退官された石田先生には、修士課程修了までの３年間に加え、博士課程で別の大学院に進学してからも共同研究という形でお世話になりました。その間に、学術的なことはもちろん、物事に取り組む姿勢や考え方、人への接し方など、本当にたくさんのことを学ばせていただき、感謝しかありません。そんな石田研での学びの日々は本当に驚きの連続でした。なかでも一番印象に残っているのは、石田先生のどんなことにも情熱を持って全力で取り組む姿勢です。研究することが本当に好きとはいえ、自ら好んで実験を行い、そのために土日祝日であろうと研究室の誰よりも早く来て最後に帰る教授を僕は他に知りません。そして、『Nature』と『Science』を定期購読して隅々までマーカーを引きながら読んでいるからなのか、自身の専門以外の分野にも造詣が深いことにも驚きました。さらに、理学部の行事である大掃除の時にも誰よりも動いている姿を見て、やると決まったことはそれが何であれ全力で取り組むんだなと驚いたことも印象に残っています。そのうえ、沖縄・琉球の歴史や文化についてもすごく詳しくて、その理由が沖縄に赴任が決まった時に図書館で本を借りて勉強し、さらに自転車で史跡巡りをしたからだと聞いて、これまた驚きました。石田研に所属していた琉球舞踊をやっている学生の発表会を一緒に観に行ったことも良い思い出です。

ちなみに、石田研は少し変わっていて、基本的には石田先生も含めた研究室のメンバー全員の机が同じ部屋にありました。そのため、実験の結果をすぐに報告することができて研究が活発に行えるだけでなく、食事やコーヒータイムを石田先生と一緒にとりながら雑談することが日常でした。それが成り立っていたのは、学生のことを第一に考え、いろんな考え方を受け入れてくれる石田先生の懐の深さによるものだと思います。実際に学生が机で寝ていようが、研究以外の活動をしていても、やることさえやっていれば特に何も言われることはありませんでした。

そこには、多くの学生が就職の道を選ぶ今、学生にとってはどんな研究をしたかよりも、研究活動を通じて科学的思考を身に着けてもらうことの方が有意義だという石田先生の考えがあったように思います。いろんなことに興味を持って観察し、解決したい課題を見つけたらそれについて徹底的に調べて解決策を考えて実行する、その結果から何が良くて何が悪かったのかを考えて次に繋げる、いわゆるＰＤＣＡサイクルをアップグレードしたかのような科学的思考はどんな仕事にも通用するから、学生にはせっかく化学系で勉強するならそれを身に着けて欲しいと石田先生が話されていたのを今でも覚えています。

石田先生の学生ファーストのスタンスは僕が博士課程の進学先について悩んでいた時もそうでした。僕が博士課程で取り組みたい研究には石田研のアミノ酸の超微量分析技術を用いながらも、石田研では行っていないげっ歯類の動物実験を行う必要がありました。そのため、石田研に残りながら動物実験の部分を共同実験でやってくれるところを探すか、動物実験の経験豊富な外部の研究室に進学して石田先生に共同実験を頼むかの二択で悩んでいました。すると、石田先生から「他の研究室を見ることも今後の人生で大事な経験になるから外に出た方が良い。受験してダメだったら拾ってやるから」と外部進学へと背中を押していただきました。そのおかげで私は3年間県外に出て様々な有意義な経験をすることができました。

本当に学び多き研究室でしたが、もちろん大変なこともありました。それは、石田先生がかなりの食通であることです。研究室での忘新年会などの幹事を務めた際には、予算内で石田先生を満足させるお店選びをすることがすごく難しかったです。それでも1年間予算をやりくりして、年度末にあぐー豚のしゃぶしゃぶのコースを食べに行って「美味しい」という言葉が聞けたときはうれしかったです。

コロナ禍の影響で石田先生の退官祝いの食事会をできなかったので、コロナ禍が落ち着いたらまた一緒に食事をさせていただき、石田先生の「美味しい」の言葉を聞ける日を楽しみにしています。

最後に、退官後は大阪府立大学の方で研究室を借りて研究を続けていると聞きました。そんな石田先生の教え子として恥じないように私も精進しながら、石田先生の今後のご活躍を期待しております。

石田先生の退官に寄せて

理工学研究科海洋自然科学専攻
化学系　卒業生
６６期　髙　橋　昇　流

まずは石田先生の退官に向けて、心よりお祝い申し上げます。医学、生化学の深い知識と経験をお持ちでありながら、数々の研究成果を築き上げられた石田先生が無事退官という一つのゴールを迎えられたこと、またその節目における先生の教え子として大学院を卒業できたこと、大変うれしく思っております。石田先生は研究だけでなく、教育に対しても「学費も安くないのだから、学費分はしっかり教育をするのが当たり前だ。」というように非常に熱心に携わっておられました。その手厚いご指導による恩恵を一身に受けた数多の卒業生の一人として、石田研での思い出を振り返りつつ、感謝の言葉を述べさせていただきたいと思います。

石田先生の研究室紹介を受けた時、先生の「ここが日本で最南端の生化学研究室です。」というたった一言で、私の関心は釘付けになりました。もともと生物系に転系しようとして失敗した自分にとって、生物を化学の立場から理解する生化学、それを亜熱帯で研究できるということがこの上なく魅力に思えました。早速研究室訪問に向かい、研究の話を聞かせていただきました。私は当時、京都大学の公開臨海実習を控えており、その主な実習内容の分野である『分子系統学』をよく知らない旨を先生に相談しました。すると「事前に完璧に知っておく必要はない。」と前置きをいただいたうえで、「どうしても心配ならこれを持っていきなさい。わからないことは大体書いてある。」と『キャンベル生物学辞典』を私に渡してくださいました。この際、「読むことはなくても枕の代わりに使える。」と非常にユニークな冗談も交えてくださったのですが、私は目の前の今までの教科書がかすむ厚さの辞典に思わず動揺して、笑うタイミングを完全に失っておりました。時々思い返しては一人で笑っております。実習では、実際に事前知識を入れることができたのも大きいのですが、何よりも手厚く応援していただける心強さがあり、慣れない分野に臆することなく課題に取り組めました。ちなみに実習先では「キャンベル生物学辞典を持参した学生は初めて見た」と話題になりました。実習が終わり、４年次で研究室配属が行われる際、お世辞にも成績が良かったとは言えない自分は、急な研究室希望の変更に押されて、荻原先生のお世話になることになりました。その際も、隣の研究室ということもあり、たまに様子を見に来てはお話をしてくださったことも覚えています。卒業研究がうまくいかず、不安を抱えていた私にとって、とても安心できる時間でし

た。学部卒業後の進路に関しても非常に熱心に相談に乗ってくださり、大学院では院生としてお世話になりました。院生としての私も、恥ずかしながら決して特別優秀ということでもなく、特別熱心というわけでもありませんでした。しかしながらそんな私を必要以上に急かすこともなく、常に私たち学生の身になって指導していただきました。実験でやり方を間違えた時、私は口癖のように「すみません」と謝る癖がありました。その時に「謝る必要はない。教えるのが教員の仕事なのだから、失敗したときは教員の指導不足だと思って、もっとちゃんと教えんかいくらいに思ってもいい」と仰っていただきました。生化学の知識も経験もほとんどない私に、論文の読み方から、理論、背景の考え方まで、非常に丁寧に教えていただきました。先生自身非常にご多忙で、研究室に泊りがけで働いてらっしゃるにもかかわらず、学生の教育に関して妥協をせず、時間を惜しまず指導をしてくださいました。社会人となった今思い返すと、あれほど寛容で良質な学習環境が整うことは今後もうあり得ないのではとすら感じます。「ちょっと質問いいですか」と質問したところ、「ちょっとといわずなんぼでも」と一つの質問に対してホワイトボードいっぱいの数式を書いて教えてくださったことも忘れません。他にもお世話になったお話を挙げればキリがありません。原稿用紙が最低あと３枚は必要になる気がします。惜しむらくは、自分にまだ熱意が足りていなかったこと、コロナ禍で研究室にいられる時間が大きく削られてしまったことです。この二つが違っていたなら、まだまだ自分が石田研でできたことはたくさんあったはずだと痛感しております。

私は今、山形の工場で研究開発の仕事に携わらせていただいております。分野としては生化学とも天然物化学とも異なる全く初めての領域で、戸惑うことや理解できないことも多々ありますが、石田先生の研究室で学んだやり方に支えられている面はとても大きいです。石田研で学んだ事、考え方、過ごした時間、みんなで食べたスイカの味、それら全てが、これからの私を力強く支えてくれる大きな財産だと考えております。石田先生、長い間大変お疲れ様でした。また、二年間に及ぶご指導賜り、誠にありがとうございました。

石田先生は今いかがお過ごしでしょうか？私も忙しく、正直近況までは把握しきれておりませんが、卒業直後はこれからも研究を続けるとのことだったと記憶しております。これからも先生の研究が続くと思うと、どこかで続報が聞けるのではないかと楽しみでなりません。先生のこれからのご活躍をお祈り申し上げます。また、先生の研究生活は非常に過酷でした。お体に障らぬようお気を付けてお過ごしください。またお元気な姿を見られることを心より楽しみにしております。

沖縄での４年間を思い出して

旭化成株式会社　環境安産課長
３６期　伊藤 憲治

満人から携帯にメッセージが入る。何か良くない事でもあったのだろうかと心配しながら観たら、同窓会誌の記事を書いてくれとの事。仕事が忙しい時期だったから、ナンギーと思った。みんな久しく会っていないけど、元気にしているのか、どうしているのか。懐かしさに浸りながら、思い出を書き留めるには良い機会だと思い引き受けて“しまった”なのである。何故なら、記事を書くには乏しい程の記憶しか残っていない事に後から気付いた。仕事が忙しく疲れていて、帰宅後も全く筆を執らずのままに、約束の月末を迎えてしまった。さて、前置きが長くなってしまったが、頑張って思い出して書き始めよう。

まず、当方が初めて沖縄へ上陸したのは、実家の九州は大分県臼杵市（みんな知っちょる？）で１８年間過ごした後である。就航したばかりの旅客機で、初めて目にした沖縄は、未だ脳裏に浮かんでくる、まさにマリーンブルーの海だった。独り生活への期待もあり、ワクワクとした気分になったことを覚えている。

住処は４年間大学寮。１８年間当たり前に入っていた湯舟のないシャワーだけの入浴場。沖縄の方は湯舟があってもほとんど使わないことを知った。その寮の新入生歓迎会で初めての飲酒。そう、泡盛を。何杯飲んだか記憶にないが、当方の飲酒能力から３杯程度と推測される。朝方まであげ尽くした。偶々来ていた同じフロアーの同期の奴の母親に看病させてしまった。御免なさい・・・青春の苦い思い出の一つ目。

初めて皆に会った講義室では、沖縄県人のウチナー語に囲まれて独り座っていた時に、淡い記憶では前後に居た伊集か伊良波か、もしくは栄だったか話し掛けてくれて、やっとウチナーの門をくぐれた。同じ列には色黒な満人と新田も居た。ほとんどが年上で同じ歳は同じケン繋がりの健（ケン）と健（タケ）ちゃん・山内・造倉に当方の５名だったと記憶しているが正しいか？女性の尚美・みち代・周の３名には歳を聞けないから判らない、という事にしておく。ウチナー語の先生は、恵章と勢理客（“じっちゃく”と打ったら出てきてビックリ！）。二人はタッグを組んで、当方に厳しいレッスンをしてくれた。でも、

覚えたのはたった２つ。いちゃびらちゃびら、なーべーらー。ぬーやるバーガー、ハンバーガー。教え甲斐がなくて御免。もう一組タッグを組んで優しくイジメてくれた、先輩後輩ペアーの饒平名と米蔵。いつもユクシだろと言って怒っていた記憶が。後は、ガタイのデカかった金子。ウチナーじゃないナイチャーだったのは、彼と造倉、そして大学ではほとんど見掛けなかった浮辺と塚本に当方の５名だった。運動の苦手な当方だったが、大学の思い出にと、満人・健ちゃん・伊集（表の年次長）・守（裏の年次長？）と一緒に走ったＮＡＨＡマラソン。大学のループ道路で練習して臨んで、どうにかこうにか制限時間の６時間半以内にはゴールした。記録よりも（自分の）記憶。最後になったが、スポーツ万能な哲ちゃんと、スポーツ万能スタイルのマキシー。マキシー、どこにいますか。みんな心配しています。連絡下さい。確かシェーキーズのピザ食べ放題を食べ過ぎた後にだったか？マキシーの車で車酔いして青ざめ死にそうになったことを記憶している・・・青春の苦い思い出の二つ目。

大学の最後は、卒論。と書きたいところだが、テーマの取扱物質がＢＤＡ（誰かがバカ・デブ・アホの略かと言っていた）で、金城教授と宇地原ウッチー先生、そしてあの上門先輩に言われるがままにデータを取って、作った論文は社会人になった後に読んでも全く理解できなかったため、タイムカプセルに納めて地中深くに埋めて当方の記憶から消しました・・・青春の苦い思い出の三つ目。

本当の最後は、その卒論を終えた後に行った卒業旅行。台湾に当方のプランで行った。恵章に分単位のスケジュールじゃ動けん、疲れたと言われた事を記憶している。当時、ウチナーで時間通りなのは、旅客機だけだと聞いていた。今でも多分同じだろう。食事ではあの養〇酒のようなスープを大量に頼んでしまい、郊外の遊園地では錆びてリアルに危険なジェットコースターでリアルに頭を打つと思った岩のトンネルを潜った。今でもまだ残っているのだろうか。みんなまた行くよ。以上、みんなの事を同期だから敢えて呼び捨てにしたが、許してくれ。

締めに、卒業後の事を少し。その後２年間は愛知県豊橋市の大学院で金属材料学をかじった。硬かった。ジェットエンジンのタービン等に使うＮｉＡｌ系合金の理論設計がテーマの修論だった。そして、旭化成へ入社。早くも３０年が過ぎてしまった。後５年、長くても１０年で定年。その後は沖縄に住む事も考えている。みんな長生きして待っていてくれ。また会おう。

高校野球の裏方として

沖縄県高等学校野球連盟　理事長
沖縄県立嘉手納高等学校
３６期　中　村　　健

1991 年、高校の教諭として働き始め、翌年の 1992 年から野球部の指導に携わらせてもらっています。同時に高校野球大会での記録員や審判員など運営側でも高校野球に関わるようになり、2002 年からは高校野球連盟（高野連）の理事の一員として、主に大会での記録に関わる仕事をさせてもらうようになりました。

2020 年、人事異動のあおりを受け、沖縄県高野連の理事長を引き受けることになり、現在その仕事に日々追われています。年間計画から各大会の企画、日本高野連との連絡や報告、様々な出費に対する判断、加盟校やマスコミおよび県民や高校野球ファンからの問い合わせや苦情、要望への対応など、仕事は多岐にわたり、一年中バタバタしています。大会期間中などは、理事長専用の携帯電話は大忙しです。

2020 年といえば、新型コロナウイルス感染拡大により甲子園大会が中止になり、本県では「2020 沖縄県高等学校野球夏季大会」をゼロから作り上げるなど、その対応に追われることになりました。そんな中、県外のマスコミと「雑談」した内容がネットニュースに掲載されてしまいました。まだ正式な発表前で、確定していない内容も含まれていたので正直慌てました。それ以降、マスコミへの対応にはとても気を遣うようになりました。裏を返せば高校野球に対する世間の関心が非常に高いことを表しているものだとも思いました。苦情や要望等が多いのもその関心の高さからくるものだと感じています。

また、高野連 OB の重鎮の方々からは、大会運営に関する苦言や助言を頂戴します。例えそれがコロナ禍での対応であっても、例年と異なる運営に対して厳しいお言葉を頂きます。その時は、高校野球の伝統の重さも同時に痛感させられます。

このような特殊な仕事なので、多くの貴重な体験もあります。例えば、具志川商業高校野球部の「センバツ高校野球大会出場」に関わる仕事はとても印象的でした。その一つは、センバツ出場決定の瞬間（校長先生が電話を受ける瞬間）に立ち会うことが出来たことです。テレビでしか見たことのない緊張の瞬間を間近で目撃し、鳥肌が立ちました。また「21 世紀枠選考委員会」において具志川商業高校野球部のプレゼンテーションをさせてもらったのも貴重な経験

で、「理事長なら誰でもできる仕事」ではないので、これは最も特殊な体験だったと言えます。一方、甲子園大会を「視察」するのも大切な仕事で、甲子園球場のスタンドで春、夏の甲子園大会を観戦（視察）できるのも理事長ならではの仕事であり、役得でもあります。

この仕事の中で様々な対応・判断を迫られる時に大切なことは、「選手のためになるのか？」を最終的な判断基準とし、常に心掛けなければいけないと思っています。世間の関心が高いあまり、高校生が犠牲になることが少なくない世界だと感じています。この仕事に携わらせてもらっている間は、高校球児のために微力ながらも努力を続けていきたいと思っています。

今後、高校野球をご覧になるとき、少しでもその「裏側」を想像していただけたら幸いです。

再度寄稿する機会をいただけたら、高校野球の指導を通して感じたことをお伝えできればと思います。これからも高校野球、高校球児へのご声援を宜しくお願いします。

（2022 年 1 月）

かけがえのない仲間との出合い

沖縄カトリック中学高等学校
４２期　知念　和代（旧姓 上原）

今回、学校現場で出会った化学科の先輩から、同窓会誌寄稿の貴重な機会を与えていただき、「わかりました。」と二つ返事で請け負ったものの、いざ取り組むと何を書けばいいのか、悩んでしまい、時間だけが過ぎてしまいました。その中で、すぐに出てきたのは学籍番号 913305E 。 当時、「アルファベットには意味があるはずだ。」という友人もいたなぁと懐かしくなりました。さて、学生時代の思い出は、何といっても実験です。基礎実験から始まり卒論まで、多くの時間を仲間とともに実験室で過ごしました。入学後の初のグループ実験では、誤差値が大きいため、レポート作成では、その理由を考察するために、図書館で参考になる本を何冊も読むなど毎回、苦慮したものです。教室で朝を迎えることも何度もありました。大きすぎる誤差値は、一度だけでなくその後も続き、何度も私を悩ませたものです。

結晶を作る実験では、メンバーのまつ毛が入っていたり、ある時は、大学へ向かうため運転していると、ハンドルをにぎっている右手（窓側）に黒い点々が出で来て、「なんだぁこれ。」と内心ドキドキの私に、「実験台に硝酸銀こぼしていたからそれじゃない。」と友人。まさかの銀イオンの還元反応だったことも有りました。そんなグループでしたが、実験はやはり楽しく、そのうち徐々に操作の正確性も上がり誤差値が減少していきました。その頃のレポートは、今でも実家の学習机の上段の引き出しに大切に保管し、当時の思い出とともに、懐かしく見返すこともあります。また、卒論で取り組んだ錯体の研究では、ビピリジンにより黄色に染色された右手のため、生協で食堂のおばちゃんに、「体、大事にしなよ。」とよく心配されたものです。当時、実験ノートに使っていたお気に入りのペンもうっすら黄色へ変色していたのを覚えています。また、夜な夜な取り組んだ NMR、IR 測定の待ち時間の先輩たちとの会話も楽しかったものです。実験室で過ごした多くの時間は、今も貴重な経験として

私の現在の職業へとつながっています。卒業後は、県の研究室、琉大での技官助手、その後、母校の高校で教員の道へ。

出産を経て、現在は沖縄カトリック中学高等学校で教鞭をとっています。中学から大学受験の生徒を相手に、毎日、緊張感をもって授業に臨んでいます。化学だけでなく、物理や時には生物を教えることもありますが、どの科目もつながりがあり、化学的な視点からのコメントをしながら、私自身も学ぶことの楽しみを味わっています。授業は、その時の話題や、生徒たちの知っている事からスタートし、生徒たちと「なぜ」を追求しながら学習しています。もちろん実験も時間が許す限り、成功するまで、生徒が納得するまで何度でも挑戦させます。時には、脱線してしまう生徒もいますが、何かに気が付き、挑戦し結果がでたときの達成感は、私が大学時代に沢山味わった喜びでもあるので、思う存分取り組ませています。受験を控えた生徒には、大学へ進学することの意義を伝えています。それは、専門性を学ぶことはもちろんですが、一番は、県内外、国外から集まった異年齢の仲間や個性豊かな教授陣との出会いだと思います。素晴らしい仲間との出会いは人生を豊かなものにしてくれます。誕生日を祝ってもらった海岸沿いの壁画のプレゼントは、皆の気持ちがこもっていて、卒業してからも辛い事や上手くいかないことがあると何度も何度も見に行っては元気をもらいました。もう、消えてしまっていますが、今でも大切な思い出の場所の一つです。誰かを思いやることがどれほど人を支えてくれるかを感じさせてくれた仲間に感謝しています。「愛されるより愛する人になりたい」と思った瞬間を今でも覚えています。本当に充実した濃い時間を過ごすことが出来たと思います。化学科のメンバーとは、卒業後はなかなか会うことはありませんが、年賀状で近況を報告したり、研修先で偶然顔を合わせることもあり、頑張っている姿を見るたびに元気をもらっています。子育て、仕事、介護…精一杯取り組んで、一段落して落ち着いたら、また、会いに行きたいと思います。そうそう、琉大祭のたびに作っていたシュークリームは今でも私の得意のスイーツですよ。また、一緒に作りたいです。

思い出のアルバム

36 期生所有のアルバムからの出典なので、36 期中心の写真となっています。ご了承ください。

1,3 年次合同研修（1985 年夏、渡嘉敷島にて　34 期の先輩方と）

第 8 回琉大化学科同窓会（兼島清先生を囲んで）

新入生（38 期の皆さん）歓迎コンパ
1987 年 4 月 25 日　玉宴にて

1, 3 年次合同研修(38 期の皆さんと)
1987 年 7 月 16～18 日
渡嘉敷島にて

青年心理学・井村弘子先生を囲んで
1987 年 2 月 20 日
農学部ビルにて

多喜ひろみさんと
FM 沖縄にて

渡久山章先生　大喜び

物理化学研究室　親睦会

36 期生 第 1 回飲み会 1985 年 4 月 金子寛之宅にて

名護市嘉陽（山内昌市別荘）にて 1986 年夏

36 期のマドンナ 3 人

化学科のメンズモデル（36 期 3 人＋34 期 1 人）

心霊スポット巡り

地学基礎実験野外実習(1988/12/10)

実験室にて

Chemistry Bears

38 期の皆さん(第 8 回同窓会にて)

38 期の皆さん（第 8 回同窓会受付）

桂先生を囲む 38 期の皆さん

森先生を囲む 38 期の皆さん

36 期生 卒業研究発表会終了

表紙デザイン

『化学の道は、挑戦の道』

３６期　造　倉　哲　治

私たちの体を見ていくと、手や足や頭や臓器があり、
さらに細かく見ていくと、細胞があり、
さらに細かく見ていくと、分子、そして原子となります。

それは、動物も植物も、土や石や、水でさえ、
同じで、全ていろんな原子の組み合わせでできているのですね。

原子は、原子核の周りを電子が回っていることを
化学の授業で学んでいるのですが、
最近気がついたことがあります。

それは、地球の周りを回る月と同じ構造だということです。
地球が原子核で、その周りを回る月が電子と考えると、そっくりなのです。

また、太陽の周りを回る地球も同じ構造です。
太陽が原子核とすると、地球が電子で、そっくりなのです。

そして、気がついたことは
私たちの体は、地球や太陽、そして美しい銀河が宿る
小宇宙であると言うこと。

それは動物も、植物も、全ての生命も、山や水や海や
この世の全てのものが小宇宙なのだと気付いたのです。

だから、完成された形であり、美しい形をしてるのです。
自然を見ても、動物、植物、虫や微生物を見ても
やはり完成された美しさを持っています。

みんなそれぞれが自分の宇宙を持っていて
完成された美しさを持っていて
そのままで完全な存在なのですね。
だから、共鳴するのだと思うのです。

化学の道は、探求すればするほど、挑戦すればするほど
宇宙の構造まで解き明かしていけるのだと思うのです。
人間の本質まで解き明かしていけるのだと思うのです。
全人類が、幸せになるために挑戦し続けたいものです。

新規会員名簿（２０２１年度）

研究室名	氏名	出身校等
安里研究室	石川　一聖	那覇高等学校
	加藤　稜涼	浜名高等学校（静岡）
荻原研究室	我如古　春登	向陽高等学校
	塚谷　達哉	土浦第一高等学校（茨城）
	吉元　太宝	那覇国際高等学校
米蔵研究室	兼次　弘也	那覇国際高等学校
	具志　龍門	向陽高等学校
	玉城　武	浦添高等学校
高良研究室	神谷　涼	那覇国際高等学校
	小林　久美子	高島高等学校（東京）
又吉研究室	浦崎　政乃臣	読谷高等学校
	新垣　秋子	向陽高等学校
	名嘉眞　里彩	与勝高等学校
中川研究室	運天　勇利	首里高等学校
	大塚　千尋	球陽高等学校
	楠目　完	中村高等学校（高知）
	関口　和樹	金光八尾高等学校（大阪）
新垣研究室	嘉納　優香	普天間高等学校
	知念　夢乃	那覇国際高等学校
	又吉　勇介	具志川高等学校
玉城研究室	糸川　瑞季	札幌光星高等学校（北海道）
	冬田　海揮	首里高等学校
	平安名　盛矢	那覇国際高等学校
有光研究室	東恩納　一樹	与勝高等学校
	フェイル　香澄	具志川高等学校
土岐研究室	中島　海翔	つくば秀英高等学校（茨城）
	中原　桂村	昭和薬科大学附属高等学校
	安村　幸真	大島高等学校（鹿児島）
滝本研究室	ｻﾄｰｺﾞ ｳﾞｨｯﾄﾘｵ 喜勇	那覇国際高等学校
	平良　優斗	宮古高等学校
	仲宗根　魁哉	読谷高等学校
田中研究室	翁長　尚輝	向陽高等学校
	所　薫	上野高等学校（東京）
	新岡　拓土	札幌北高等学校（北海道）
藤村研究室	金城　臣弥	向陽高等学校
	具志堅　政哉	那覇国際高等学校
	町田　宗司	那覇国際高等学校
鈴鹿研究室	伊屋ヶ迫　昂明	加計高等学校（広島）
	上江洲　杏佳	那覇国際高等学校
	島袋　淳也	開邦高等学校
漢那研究室	赤嶺　真子	那覇高等学校
	上間　さくら	球陽高等学校
	仲泊　百花	普天間高等学校
島田研究室	鬼頭　壮一郎	旭川西高等学校（北海道）
	鉢嶺　皆子	コザ高等学校
	森田　結菜	首里高等学校

理工学研究科所属一覧

（Ｍ１）

研究室名	氏名	出身大学（国）	研究テーマ
安里研究室	當　眞　　諒	琉球大学	３d ブロック元素を用いた新規ニトリル水和触媒の開発
中川研究室	TRIPATHI ANKIT KUMAR	インド	アンモニアボランの合成・再生法の開拓
新垣研究室	藏元　里佐子	琉球大学	台風時における海塩粒子の特性解明
有光研究室	源河　　理子	琉球大学	フッ化アミノ酸誘導体の合成
	東門　　大輝	琉球大学	フッ化アリルの合成
	真栄田　りな	琉球大学	天然物の誘導化反応
土岐研究室	河野　　彩香	琉球大学	マルチアイソトープを用いた沖縄県辺戸岬におけるエアロゾル中の金属元素の起源
藤村研究室	照屋　　利来	琉球大学	海洋マイクロプラスチックのサンゴへの影響に関する研究
照屋研究室	東條　　隼也	琉球大学	沖縄産海洋シアノバクテリアが生産するデプシペプチドの単離、構造決定
	八木澤　和正	琉球大学	沖縄産海洋シアノバクテリアから単離した環状ペプチドの構造決定

（Ｍ２）

研究室名	氏名	出身大学（国）	研究テーマ
安里研究室	喜納　彩	琉球大学	鉄錯体を用いたチオエーテルの触媒的 C−S 結合切断反応
中川研究室	矢野　知郷	琉球大学	休学中
新垣研究室	平安　瞳	琉球大学	大気エアロゾルに含まれる界面活性剤の特性について
有光研究室	志茂　樹	琉球大学	天然物の単離研究
	照屋　喜克	琉球大学	天然物の単離研究
土岐研究室	満留　由来	琉球大学	種子島沖海底泥火山における表層堆積物中の希ガスの起源
田中研究室	TRIANDA AYUNING TYAS	インドネシア	海綿とソフトコーラルからのテルペノイド生合成遺伝子の探索
藤村研究室	池上　晃平	麻布大学	サンゴへの微量元素の取り込みに関する研究
	徳浜　すみれ	琉球大学	備瀬海域における硫化水素と栄養塩の動態
漢那研究室	大城　勇斗	琉球大学	溶液中における蛍光色素分子の光化学的挙動
照屋研究室	安里　優佳	琉球大学	海洋シアノバクテリア Okeania sp. が生産する脂肪細胞分化促進物質の探索
	神野　敦秀	琉球大学	沖縄産海洋シアノバクテリアに含まれる新規薬理活性物質の探索

（Ｄ１）

研究室名	氏名	出身大学（国）	研究テーマ
有光研究室	遠藤　克己	琉球大学	フッ素化反応の開発

（Ｄ３）

研究室名	氏名	出身大学（国）	研究テーマ
新垣研究室	岩崎　綾	琉球大学	休学中
田中研究室	山内　真梨江	琉球大学	休学中

学年は 2021 年 10 月 1 日現在

令和３年度　役員・各期幹事名簿

１．同窓会役員

顧　　問	普久原　朝　喜	
会　　長	宮　城　　守	（３６期）
副 会 長	安　里　満　人	（３６期）
副 会 長	伊　集　守　道	（３６期）
事務局長	新　田　　昇	（３６期）
会　　計	瑞慶山　尚　美	（３６期）
書　　記	勢理客　　智	（３６期）
書　　記	城　間　恵　章	（３６期）
監　　査	高　島　勇　次	（３５期）
監　　査	平　良　直　秀	（３７期）

２．各期幹事

1期　大　城　清　一	24期　奥　間　　有	47期　国　場　　豊
2期	25期　山　田　　保	48期　米　須　清　彦
3期　伊　礼　　正	26期　真栄里　美　保	49期　伊志嶺　早　苗
4期　新　垣　庸一郎	27期　佐久本　　守	50期　屋嘉比　康　彦
5期　下　地　康　嗣	28期　幸　地　綾　子	51期　伊　敷　直　純
6期　友　寄　英　諄	29期　萩　原　和　仁	52期　仲　真　良　秀
7期　仲　里　利　信	30期　田　場　　繁	53期　伊　藤　道　裕
8期　吉　川　嘉　勝	31期　佐和田　正　二	54期　小　谷　有　司
9期　伊良部　光　男	32期　川　満　裕　史	55期　東　江　　浩
10期	33期　大　湾　雅　一	56期　神　里　知　洋
11期　大　城　忠　一	34期　宮　城　喜一郎	57期　田　崎　盛　也
12期　川　満　　尚	35期　安　里　利　光	58期　村　田　正　将
13期　高　嶺　朝　勇	36期　中　村　　健	59期　又　吉　健太郎
14期　幸　喜　　稔	37期　平　良　直　秀	60期　兼　次　陽　大
15期　富　永　　勇	38期　山　里　　崇	61期　上　里　裕　紀
16期　比　嘉　敏　勝	39期　武　村　盛　久	62期　渡　辺　公美子
17期　玉　城　正　信	40期　瑞慶山　　功	63期　田　中　志貴子
18期　宮　城　朝　順	41期　赤　嶺　成　久	64期　島　袋　泰　博
19期　佐久眞　　章	42期　川　満　永　公	65期　金　城　盛　人
20期　糸　数　初　枝	43期　宮　城　　健	66期　新　垣　竜之介
21期　伊　元　幸　春	44期　新屋敷　博　人	67期　龍　山　智　道
22期　西　浜　完　治	45期　小　島　健　司	68期　照　屋　利　来
23期　平　良　辰　二	46期　真　壁　慎　治	69期

琉球大学化学同窓会会則

（目　的）

第１　条　本会の目的は、化学する心を育み、会員相互の親睦と琉球大学化学及び海洋自然科学の発展に貢献することを目的とする。

（名称及び事務局）

第２　条　本会は､琉球大学化学同窓会と称し、事務局を理学部海洋自然科学科（化学系）事務室に置く。

（会　員）

第３　条　本会の会員は次のとおりとする。

（１）　正 会 員　琉球大学化学科同窓生。海洋自然科学科卒業生、理工学研究科化学関連研究生並びに関連する大学院生。

（２）　特別会員　正会員以外の琉球大学化学科現旧職員、及び琉球大学教官で本会の主旨に賛同する者。

（３）　準 会 員　琉球大学化学科在学生、海洋自然科学科（化学系）在学生、及び正会員以外の同大学院生。

（４）　賛助会員　本会の趣旨に賛同し、役員会で推薦した者。

（事　業）

第４　条　本会は、前条の目的達成のために、次の事業を行う。

（１）　会誌の発行

（２）　会員名簿の管理

（３）　琉球大学海洋自然科学科（化学系）教官の退職激励会及び叙勲者、受賞者の激励会。

（４）　その他、本会の目的達成のために必要な事業。

（会員の務め）

第５　条　会員は転居、改正の都度、その旨本会事務局に通知するものとする。

（役員の構成）

第６　条　本会に次の役員を置く。

会長１名、副会長１名、事務局長１名、会計１名、書記２名、
琉球大学海洋自然科学科（化学系）漢字名。
会計監査委員２名。

（役員の選出）

第７　条　役員は次のとおり、会員の中から選出する。

（１）　会長、副会長は各期持ち回りとし、総会において選出する。

（２）　事務局長、会計、書記、会計監査委員は会長が委嘱する。

（３）　琉球大学化学幹事は海洋自然科学科（化学系）主任があたる。

（役員の任務）

第８　条　役員の任務は次のとおりとする。

（１）　会長は、本会を代表し、会務を総括する。

（２）　副会長は、会長を補佐し会長に事故ある時は、その職務を代行する。

（３）　事務局長は、会長の指示により、会務を統率し、その事務を処理する。

（４）　会計は、会計事務を処理する。

（５）　書記は、会議の議事録の整理と文書事務を処理する。

（６）　琉大幹事は、大学側を代表し、大学同窓会との連絡調整の任にあたり会務が円滑に遂行できるようにする。

（７）　会計監査委員は、本会の財産及び会計等の諸帳簿を監査し、その結果を総会で報告する。

（顧問の設置）

第９　条　本会は、特別会員及び本会に貢献した者の中から若干名の顧問を置くことができる。

顧問は会長の相談に応ずる。

（役員、顧問の任期）

第１０条　役員、顧問の任期は次のとおりとする。

（１）　役員の任期は１年とする。

（２）　顧問の任期は２カ年とし、再任を妨げない。

（各期幹事）

第１１条　各期に幹事１名を置く。各期幹事は各期で互選する。

各期幹事は各期を代表し、同窓会と同期生との連絡調整の任にあたり、会務が円滑に遂行できるようにする。

（総　会）

第１２条　総会は年度１回、定期総会を開催する。

２．定期総会は次の事項を審議決定する。

（１）会則の改正　（２）役員の選出　（３）会務報告及び会計報告

（４）予算、決算の承認　（５）その他必要な事項

３．会長が必要と認めたときは、臨時総会を開催することができる。

４．総会の議長は会長が務める。

（役員会）

第１３条　役員会は第６条の役員で構成する。

２．会長は必要に応じて、役員会を開催することができる。

３．役員会の任務は次のとおりとする。

（１）　総会に提出する議案の審議。

（２）事業に関する企画と運営。

（３）正、特別、賛助会員の推薦。

（４）その他必要な事項。

４．役員会は、役員の３割以上の出席を持って成立する。
５．本会の会務執行は、役員会において、協議決定し、会員に通知する。
６．役員会は、この会則に定められている事項のほか、急を要する事項について決定することができる。

（決　議）
第１４条　総会、役員会の決議は、出席者の過半数による。賛否同数の場合は議長の決するところによる。

（会　費）
第１５条　本会の会費は年間２，０００円とする。但し、終身会費１０，０００円でこれに替える事ができる。

（運営費）
第１６条　本会の運営費は次の収入をもって当てる。
（１）会費　（２）寄付金　（３）その他

（諸帳簿の備付）
第１７条　本会に次の諸帳簿を備える。
（１）会員名簿　（２）議事録　（３）会費徴収簿　（４）金銭出納簿
（５）財産目録　（６）備忘録綴

（会則の改正）
第１８条　本会則の改正は総会の議決による。

（解　散）
第１９条　歩会の解散は総会の議決による。

（会計年度）
第２０条　本会の会計年度は４月１日に始まり、翌年３月３１日をもって終了する。

（細則決定）
第２１条　本会則の施行についての細則は、役員会の承認を得て、会長が定める。

（個人情報保護方針）
第２２条　琉球大学化学同窓会個人情報保護方針を別途定める。

付則
この会則は、平成３年９月１４日から施行する。

付則
この会則は、平成１０年１１月１４日から施行する。

付則
この会則は、平成１８年２月２５日から施行する。

付則
この会則は、平成２３年１月２２日から施行する。

付則
この会則は、平成２９年１１月４日から施行する。

琉球大学化学同窓会個人情報保護方針

1　基本的な方針

琉球大学化学同窓会は、平成２７年９月に改正された個人情報保護法の平成２９年５月３０日付けの全面施行を受けて、同窓会員の個人情報の適切な保護及び利用の重要性に鑑み、『個人情報保護に関する基本的な考え方』について、以下の基本方針で取扱いします。

（１）琉球大学化学同窓会は、会員の個人情報の取り扱いに際し、個人情報保護法の精神を厳正に遵守し、個人情報管理責任者を置き、本会並びに業務委託先も含めた個人情報の適切な取り扱いに努めます。

（２）個人情報の収集は、本会の利用目的の範囲内において、適正な手段で行います。

（３）個人呪法の漏洩・毀損・滅失等の内容にし、充分正確かつ安全に管理します。

（４）個人情報収集時に明示し、同意いただいた利用及び提供の範囲を超えた個人情報の利用および提供はいたしません。

‘（５）会員から、個人情報の開示、訂正、追加または削除等の申し出があった場合は、適切な範囲で速やかに対応いたします。

（６）個人情報保護のための管理体制、および取り組みを継続的に見直し、その改善を図ります。

琉球大学化学同窓会は、ユーザーのプライバシー保護にあらゆる努力をしますが、裁判所や政府行政機関などから召喚状、令状、命令などの法的手続きなどの要求に応じる際には、情報を開示することがあります。

2　会員の個人情報保護について

会員からご提供いただいた個人情報は、琉球大学化学同窓会内の安全な環境で厳重に管理、保存されます。

琉球大学化学同窓会では、会員のプライバシーを守秘するための努力を怠ることはありませんが、司法上の処理、裁判所命令、同窓会のサイト上における法律上の処理に従う必要性があると判断した場合は、法に基づき個人的な情報を公表する可能性があります。

（１）　登録していただく個人情報について

①　氏名、住所、電話番号

②　必要に応じ、メールアドレス、職業、勤務先（名称、電話番号）

（２）　個人情報の利用目的について

①　総会・懇親会の開催通知

②　同窓会会員名簿（原簿）の編纂・加筆（同窓会名簿の発行、会員への配布は行いません。なお、必要に応じ、各期幹事への当該期会員の個人情報を提供します。）

③　その他の同窓会事業（総会資料及び会誌への役員及び各期幹事の氏名の掲載等）

（３）　個人情報の開示・訂正・削除

①　登録いただいた個人情報は、原則として本人に限り、開示・訂正･削除を求めることができます。

②　同窓会会員は、住所に変更があった場合は、情報を正確に更新するため、変更前後の情報を同窓会までお知らせください。

③　具体的な方法については、記載されている連絡先にお問合せください。

④　個人情報の開示・訂正・削除のご依頼があった場合、原則として本人であることが確認できた場合に限り、合法的な範囲（利用目的の達成に必要な範囲内）において速やかに対応致します。

３　個人情報の第三者への提供

同窓会は、登録いただいた個人情報を本人の承諾なく第三者に開示することはありません。ただし、次の場合は個人情報を第三者へ提供することがあります。

①　利用者の作為・無作為を問わず、当支部の権利や資産、および第三者などに対し損害または不利益を与える可能性のある場合、当支部はその行為を行った会員の情報を調査し、当該第三者や警察または関係諸機関に通知することがあります。

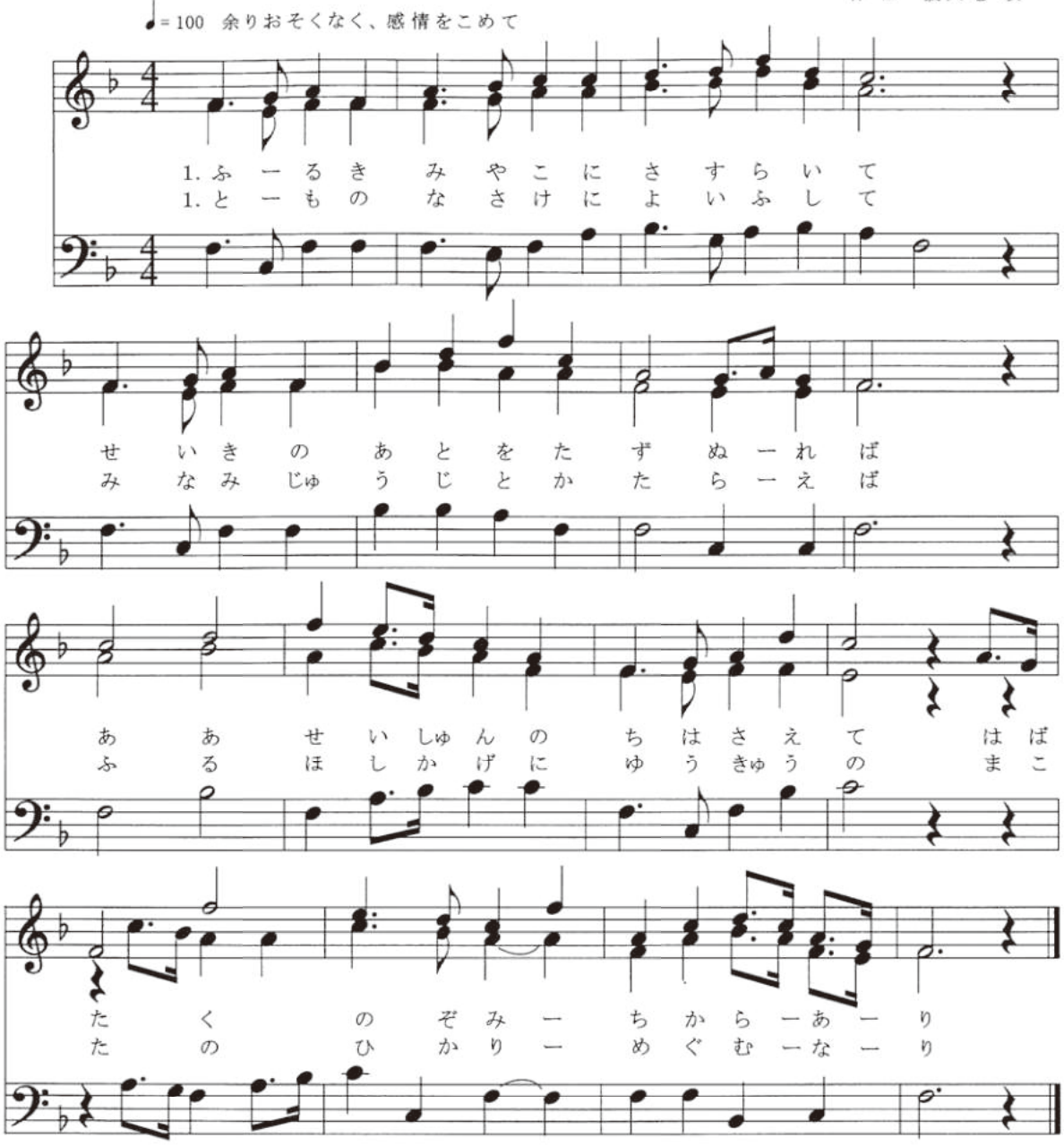
②裁判所、検察庁、警察またはこれらに準じた権限を有する期間から、利用者からの提供情報および個人情報の開示を求められた場合、当支部はこれに応じて個人情報を開示することがあります。

③個人情報保護法第２３条に基づく場合、開示できるものとします。

平成２９年１１月４日

琉大逍遥歌

1952年5月22日制定
作詞　新川　豊
作曲　渡久地政一



琉大逍遥歌

作詞　新川　豊
作曲　渡久地政一

一、ふるき都に　さすらいて
世紀のあとを　尋ぬれば
ああ青春の　血はさえて
羽ばたく希望　力あり

二、友の情けに　酔いふして
南十字と　語らえば
降る星影に　悠久の
真理の光　萌むなり

三、われら若人　純情に
巷の恋は　うそぶけど
見よ東雲に　翔りゆく
旦の生命　息吹あり

編集後記

この度は琉球大学化学同窓会誌「琉大化學」第 36 号発刊の準備中のところ、とても嬉しい知らせが入りました。琉球大学名誉教授 與儀誠一先生に瑞宝中綬章、沖縄県ユネスコ協会顧問・学校法人大智学園理事長 仲筋一夫先生（14 期）に瑞宝小綬章のダブル叙勲で新型コロナウィルス感染症の影響で気持ちが沈みがちな中、本同窓会にとって明るいニュースとなりました。叙勲を祝って、琉球大学教授 萩原和仁先生（29 期）におかれましては卒業研究等の学生指導でお忙しいところ、與儀誠一先生の瑞宝中綬章の受賞に寄せてのご祝辞をありがとうございました。

また、琉球大学化学同窓会の枠を超えて、琉球大学前学長 大城肇先生、八重山高等学校 21 期生 内間康洋氏におかれましては仲筋一夫先生の瑞宝小綬章叙勲へのお祝いの言葉をいただきましてありがとうございました。

さらに、2021 年 3 月に退官された棚原朗教授、石田哲夫教授、両先生には同窓会誌「琉大化學」の発刊が大変遅れましたことをお詫び申し上げます。また、両先生の退官に寄せてのお祝いの言葉や思い出と近況でご寄稿いただきました卒業生の皆様には厚く御礼申し上げます。

さて、今年度幹事学年となりました 36 期生ですが、先輩方のアドバイスにより早めに同窓会準備に取り掛かろうと一昨年の 2020 年 1 月に集まったものの、その後は新型コロナウィルス感染症の感染拡大で同窓会準備も頓挫し、ようやく動き出したのは緊急事態宣言が明けた昨年の 10 月からでした。そのため、例年 11 月に行っていた総会や同窓会誌の発刊が 2 月に延期になりました。これには感染症の影響だけでなく 36 期生の「なんくるないさ」のアバウトな気質が大きな要因であることに他ならず、改めてお詫び申し上げます。残念ながら 2 月の総会も中止せざるを得ない状況となりました。同窓会誌も一時は執筆依頼が難航し、短期間での原稿提出を余儀なくされ、寄稿していただきました皆様には大変失礼いたしました。お蔭をもちまして琉球大学化学同窓会誌「琉大化學」36 号の発刊に漕ぎ着けることができました。関係各位に改めて御礼申し上げます。

最後になりましたが、ご指導、ご協力いただきました琉球大学理学部海洋自然学科化学系教授 新垣雄光先生、同事務室 上原様におかれましては本務多忙の中、ずさんな取り組みにも関わらず、36 期幹事学年に骨を折っていただきまして誠に感謝申し上げます。

36 期　安　里　満　人

36 期化学科ベアーズ（2020 年 1 月）

琉大化學

第 36 号

表 紙 題 字　森　　巌　氏
表紙デザイン　造倉　哲治　氏

発　　行　令和 4 年 2 月 28 日

発 行 者　琉球大学化学同窓会
沖縄県西原町千原一番地

琉球大学理学部
海洋自然科学科（化学系）事務室
TEL (098)895-8100
FAX (098)895-8565

印　　刷　有限会社 総合企画 和光
浦添市西原6丁目1番1-201号
TEL (098)876-3047